

新に帝室技藝員に任ぜられたる所感

黒田清輝

ヤア幾度もく、足を運ばせてお氣の毒でした、どうか今日は此通り在宅してめますから、お通り下さいと、清輝氏は玄關から座敷へ案内される

別に是と云つて八釜しい所感も有りませんが、是迄日本の洋畫が兎角不振で有つたものが、近年に至つて長足の進歩をした、ソコでお上でも、切角勉強しろよと云ふ思召で、是迄に例のなかつた洋畫家に帝室技藝員をお授けになつたのは獨り自分一個の光榮のみでなく、一般の洋畫界に對しての名譽の事であるは云ふまでもない。

ソコで東京の洋畫各派の人々が集つて、盛んに祝賀會を開て下さるし、又東京斗でなく大阪でも盛んに祝をせられたと云ふ事に對しても、いかに洋畫界一般が今回の思召を難有く思つてゐるかと云ふ事が證明される。

これからは、此思召に背かず、各派協力して此油畫の發達と云ふとに飽迄も盡さねばならぬと思ふのです

氏は尙云ふ所ありしも、記者多忙の爲め筆記を紛失したれば、單に大體の意味をのみ紹介に止め置く、氏の寫眞を請求せしに已に一枚もなしとの事に付、席上直ちに氏が自畫像を乞ひて掲載すると、はなしぬ。



黒田清輝氏自画像

帝室による美術の保護奨励を謳った帝室技藝員の制度は明治三十三年に設けられたが、当初それは日本の伝統的な美術工芸に携わる作家を対象としたものだった。本文献にもあるように洋画家としては黒田が初めての拜命であり、それは洋画の地位向上と同時に、明治四〇年の文展設立後、方向転換を余儀なくした制度のあり方を示唆するものといえよう。祝賀会は明治四三年二月一七日に正木直彦、森鷗外らを発起人として上野精養軒で行なわれたが、その同日同刻に鹿子木孟郎や山内愚仙ら京阪の洋画家も、洋画家の名誉として大阪ホテルで祝賀会を開催している。帝室技藝員制度については、サントリー美術館『近代美術の巨人たち 帝室技藝員の世界』展図録（平成八年九月）を参照。